九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[65]文學研究表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/2339144

出版情報：文學研究. 65, 1968-03-30. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

目加田誠先生小照

目加田　誠教授年譜略

明治三十七年二月三日　福岡県久留米市に目加田生五郎の長男として生まる　本籍地は山口県岩国市大字横山二六二番地

大正十年三月　山口県立岩国中学校卒業

大正十五年三月　水戸高等学校卒業

昭和四年三月　東京帝国大学文学部支那文学科卒業　この間昭和三年三月東京外国語学校支那語専修科を卒業

同　年四月　東京帝国大学大学院に入学　東方文化学院東京研究所助手を命ぜられる

昭和五年九月　第三高等学校講師に就任

同　年十二月　第三高等学校教授に命ぜられる

昭和八年七月　九州帝国大学助教授に就任

同　年十月　中国文学研究の為に中華民国に留学

昭和十年三月　帰朝

昭和十一年十月　満州国及び中華民国へ出張を命ぜられる

同　年十二月　帰学

昭和十三年三月　九州帝国大学教授に任命せられる

昭和十七年　十　月　中華民国へ出張を命ぜられる
同　　年十二月　帰学
昭和二十一年　十　月　小倉外事専門学校講師を委嘱せられる
昭和二十五年　六　月　文学博士の学位を授与せられる
昭和二十九年　四　月　福岡女子大学講師を委嘱せられる
昭和三十年　十　月　東京都立大学大学院講師及び福岡女子大学講師を委嘱せられる
昭和三十一年　四　月　東京都立大学及び福岡女子大学講師を委嘱せられる
昭和三十二年　一　月　日本学術会議第四期会員を命ぜられる
同　　年　七　月　九州大学文学部長に補せられる
昭和三十六年　六　月　九州大学文学部長の二期にわたる併任を終了
昭和三十七年　四　月　佐賀大学講師に併任せられる
昭和三十八年　七　月　九州大学文学部長に補せられる
昭和三十九年　四　月　願に依り九州大学文学部長を免ぜられる
昭和三十九年　十　月　訪中学術代表団団員として中華人民共和国に招かれる
昭和四十年　四　月　長崎大学講師に併任せられる
昭和四十二年　三　月　九州大学文学部教授を停年により退職
昭和四十二年　四　月　早稲田大学文学部教授　現在に至る
昭和四十二年十一月　「中国文学研究の功績」により西日本文化賞受賞

目加田　誠教授講義題目

自　昭和八年七月
至　昭和四十一年三月

昭和八年度
昭和九年度　中国留学のため講義なし

昭和十年度第一学期　清季学術文芸
　　第二学期　紅楼夢講読

昭和十一年度第一学期　詞学及詞選
　　第二学期　小説演習（紅楼夢第十九回より）

昭和十二年度第一学期　詩経講義
　　第二学期　詞学及詞選
　　小説演習（紅楼夢）

昭和十二年度第一学期　詩経講義
　　小説演習（儒林外史）

第二学期　詩経講義
　　小説演習（儒林外史）

昭和十三年度第一学期　詩経講義
　　小説演習（今古奇観）

第二学期　詩経講義
　　小説演習（今古奇観）

昭和十四年度第一学期　詩経講義
　　顔氏家訓（演習）

第二学期　詩経講義
　　顔氏家訓（演習）

昭和十五年度第一学期　支那文学概論
　　詩経講義

第二学期　支那文学概論
　　詩経講義

昭和十六年度第一学期　詩経周頌
　　文心雕龍（演習）
第二学期　詩経講義
　　文心雕龍（演習）

昭和十七年度第一学期
第二学期　中国留学のため休講

昭和十八年度第一学期　楚辞講義
　　六朝文芸論（演習）
第二学期　楚辞講義
　　六朝文芸論（演習）

昭和十九年度第一学期　文選講義
　　支那文学音韻学（演習）
第二学期　詩経（大雅の研究）
　　文心雕龍解説

昭和二十年度第一学期　支那文学論（文心雕龍講釈）
　　杜甫詩（演習）
第二学期　杜甫詩（講読）
昭和二十年度第三学期　白居易の文学
後学期　桃花扇（講読）
　　支那文芸論（鐘嶸詩品の研究）

昭和二十一年度第一学期　詩経小雅の研究
　　桃花扇（講読）
第二学期　詩経小雅の研究
　　桃花扇（講読）

昭和二十二年度第一学期　中国文学概論
　　小説演習
第二学期　中国文学概論
　　小説演習

昭和二十三年度第一学期　中国文学論の研究
　　西廂記（演習）

第二学期　中国文芸論
　　西廂記（演習）

昭和二十四年度第一学期　詩経研究
　　儒林外史（講読）
第二学期　詩経研究
　　儒林外史（演習）

昭和二十五年度第一学期　唐代文学論
　　儒林外史（演習）
第二学期　唐代文学史
　　儒林外史（演習）

昭和二十六年度第一学期　唐代文学史講義
　　元曲（演習）
　　唐代小説（演習）
第二学期　唐代文学史講義
　　元曲（演習）
　　唐代小説（演習）
　　唐代文学史講義

昭和二十七年度第一学期　紅楼夢（演習）
　　詩経の研究（演習）
第二学期　唐代文学史講義
　　紅楼夢（演習）
　　詩経の研究（演習）

昭和二十八年度第一学期　明朝文学史講義
　　毛詩正義（演習）
　　小説演習
第二学期　明朝文学史講義
　　毛詩正義（演習）
　　紅楼夢（演習）

昭和二十九年度第一学期　清朝文学史講義
　　明朝短編小説集（演習）
　　楚辞（演習）
第二学期　宋元明白話短編小説の研究
　　清朝文学史講義
　　明朝短編小説集（演習）

楚辞（演習）

昭和三十年度第一学期
- 中国小説史の研究
- 清朝文学史講義
- 紅楼夢（演習）
- 楚辞（演習）

第二学期
- 中国小説史研究
- 楽府研究
- 詩経研究（演習）
- 紅楼夢（演習）

昭和三十一年度第一学期
- 楽府研究
- 説文解字注（演習）
- 詩経（演習）
- 紅楼夢（演習）

第二学期
- 唐代文学
- 説文解字注（演習）
- 紅楼夢（演習）
- 毛詩鄭箋（演習）

昭和三十二年度第一学期
- 唐代文学史
- 説文解字注（演習）
- 毛詩鄭箋（演習）
- 紅楼夢（演習）

第二学期
- 唐代文学史
- 楽府研究
- 毛詩鄭箋（演習）
- 説文解字注（演習）

昭和三十三年度第一学期
- 唐代文学史
- 楚辞（演習）

第二学期
- 唐代文学史
- 楚辞（演習）

昭和三十四年度第一学期
- 文心雕龍（演習）
- 楚辞（演習）

第二学期
- 詩品の研究
- 文心雕龍（演習）
- 楚辞（演習）

昭和三十五年度第一学期
- 六朝文学研究
- 中国文学概論
- 文心雕龍（演習）
- 六朝文芸論研究

第二学期
- 中国文学概論
- 文心雕龍（演習）
- 春秋左氏伝（演習）

昭和三十六年度第一学期
- 中国文芸思想
- 六朝文学評論（演習）
- 春秋左氏伝（演習）

第二学期
- 中国文学概論
- 毛詩国風（演習）
- 六朝文芸論（特殊講義）

昭和三十七年度第一学期
- 唐詩（杜甫）講義
- 毛詩鄭箋（演習）
- 梁啓超（演習）
- 宋代詩話（演習）

第二学期
- 唐詩（杜甫）講義
- 毛詩鄭箋（演習）
- 漢魏六朝一百三家集題辞
- 清代学術概論（演習）

昭和三十八年度第一学期
- 唐詩（王維）講義
- 毛詩鄭箋（演習）
- 漢魏六朝一百三家集題辞
- 特研

第二学期
- 唐詩選講義
- 毛詩鄭箋（演習）
- 漢魏六朝一百三家集題辞
- 特研

昭和三十九年度第一学期
- 五代宋文学講義
- 楚辞集注（講読）
- 文論要詮（演習）
- 説文解字注（演習）
- 宋代文学講義

第二学期
- 楚辞集注（講読）
- 文論要詮（演習）
- 説文解字注（演習）

昭和四十年度第一学期
- 中国文学概説
- 世説新語（演習）
- 文心雕龍（特研）

第二学期
- 中国文学概説
- 世説新語（演習）
- 文心雕龍（特研）

昭和四十一年度第一学期
- 詩経講義
- 世説新語（演習）
- 文心雕龍（特研）

第二学期
- 詩経講義
- 世説新語（演習）
- 文心雕龍（特研）

目加田　誠教授研究著作目録

昭和四十三年三月現在

〔単行本〕

中国現代文芸	共立社（漢文学講座）	昭和　八年　十一月
詩経	日本評論社	昭和　十八年　三月
風雅集	淳信堂	昭和二十二年　七月
詩経訳註篇（国風）	丁字屋書店	昭和二十四年　十一月
新訳詩経	岩波書店	昭和二十九年　一月
詩経・楚辞	平凡社	昭和三十五年　一月
唐詩選	明治書院	昭和三十九年　三月
杜甫	集英社	昭和四十一年　六月
洛神の賦	武蔵野書院	昭和四十一年　十一月
屈原	岩波書店	昭和四十二年　十二月

〔主要論文〕

雍正帝の思想対策について	漢学会雑誌第一巻第一号	昭和　八年　六月
填詞選釈	文学研究十三輯（九州大学文学部紀要）	昭和　十年　十月

民国以来中国新文学	文学研究十四輯	昭和十年十二月
詞源流考	服部先生古稀祝賀記念論文集	昭和十一年四月
清代文学史	世界文芸大辞典第七巻「支那文学史」(中央公論社刊)	昭和十一年五月
雅について	文学研究二十輯	昭和十二年十月
白楽天の諷諭詩	文学研究二十三輯	昭和十三年十月
幽詩考附束新考	文学研究二十五輯	昭和十四年六月
詩経に詠はれた自然界	文学研究二十八輯	昭和十六年三月
陳磧甫伝	文学研究二十九輯	昭和十六年八月
春秋の断章賦詩に就いて	文学研究三十一輯	昭和十七年六月
詩教	文学研究三十三輯	昭和十八年十二月
文心雕龍(一)	文学研究三十四輯	昭和二十年三月
文心雕龍(二)	文学研究三十五輯	昭和二十一年三月
洛神賦	文学研究三十六輯	昭和二十三年三月
六朝文芸論に於ける「神」と「気」の問題	文学研究三十七輯	昭和二十三年十二月
詩格及び詩境に就いて	文学研究三十八輯	昭和二十四年十二月
李笠翁の戯曲	文学研究三十九輯	昭和二十五年三月
文心雕龍(三)	文学研究四十輯	昭和二十五年十一月

文心雕龍 (四)	文学研究四十一輯	昭和二十六年　三月
初唐宮廷詩人の群	日本中国学会報 二集	昭和二十六年　三月
唐代小説について	東方学 二一輯	昭和二十六年　八月
曹禺の戯曲	文学研究四十二輯	昭和二十六年　十一月
王維—安史の乱と詩人たち—	文学研究四十三輯	昭和二十七年　三月
楽府についての一考察 —民歌と文人の詩の問題—	文学研究四十五輯	昭和二十八年　三月
滝沢馬琴と水滸伝	文学 巻二一	昭和二十八年　九月
文心雕龍 (五)	文学研究四十七輯	昭和二十八年　十二月
水滸伝解釈の問題	文学研究五十輯	昭和二十九年　十二月
聞一多評伝	文学研究五十二輯	昭和三十年　六月
孽海花	文学研究五十四輯	昭和三十一年　三月
詩経	「中国文学史の問題点」 (中央公論社刊)	昭和三十二年　六月
礼教喫人	文学研究五十六輯	昭和三十二年　七月
二人の宝玉	文学研究五十七輯	昭和三十三年　三月
九歌試訳	文学研究五十八輯	昭和三十四年　七月
文心雕龍 (六)	文学研究六十輯	昭和三十六年　三月

文学と道徳 ―中国近代文学に於ける儒教道徳排撃の思想について―	九州大学比較教育文化研究紀要八号	昭和三十六年　五月
詩経（豳風十月「殆及公子同儔」）について	倉石博士還暦記念論集「中国の名著」	昭和三十六年　七月
杜甫	宇野博士米寿記念論集「中国の思想家」上巻	昭和三十八年　五月
文心雕龍 (七)	文学研究 六十二輯	昭和三十八年　九月
紫陽花	文学研究 六十三輯	昭和四十一年　三月
風格ということ	教育と医学	昭和四十一年　四月
中国文芸思想における自然ということ	日本中国学会報十八集	昭和四十一年　十月
祝福の書かれた頃	東京支那学報十三号	昭和四十二年　六月

「文学研究」の思い出

目加田誠

私は昭和八年、当時の第三高等学校から九大に転任して、そのまますぐ中国に留学し、昭和十年帰朝して、中国文学講座をうけもったが、そのとき文学部の文学科では、以前から教官による文学研究会というものがあり、雑誌「文学研究」が刊行されていることを聞いた。新任の私は早速これに執筆を命ぜられた。当時この会の推進力は独乙文学の佐藤通次さんだったようだ。

佐藤さんの説得力はおそるべきもので、何びとと雖も叶わない。なにしろ企画性と実行力を強く兼ねているのだから。私などは全く命のままだ。ただ私が一つだけ佐藤さんのすすめに頑として従わなかったことがある。その頃、文学部の若い先生方——といっても皆私の先輩だが——の間に謡曲がはやっていたようで、佐藤さんもその熱心な一人だった。それが私に向って謡曲の稽古をすすめられる。私は元来音痴もいいところだし、第一あんな大きな声を出すのはきまりが悪くてしようがないから極力辞退した。しかし何分強い説得力だから困ってしまい、最後に一策として、小牧先生がもしお始めになるなら

私も一緒にやりましょうといった。小牧先生はそれを聞いて、「私はもうけいこしました」と、まじめな顔で言われたのには思わず吹き出し、それっきり私は謡曲に縁がないのである。

小牧先生は私の水戸高校時代の恩師である。だから九大の廊下で出あって、うやうやしく敬礼をすると、先生はちょっとあの特色あるあごをしゃくって会釈される。私はどうしても頭があがらなかった。ある時先生の茶園谷のお宅で御馳走になったことがある。佐藤さんも一緒だった。その時何かの話から先生は、「近頃宅に鼠が出てこまるので、ある夜半、私は蒲団の上に端座して、鼠に話してきかせました。ここはお前たちの来るところではないと。するとその翌夜、女中がけたたましい声で騒ぐのでなにごとかと思ったら、蒲団の中から鼠が跳び出た、というのです。それきり鼠は出なくなりました。」私はあまりおかしいから、それでは先生、のみや蠅にも通じる筈ですね、といったら、先生はあの灰色の澄んだ目をじっと動かさず、「まごころから話しかければ、通じると思います。」と答えられた。独乙文学の神秘性というのかな、と、私はつくづく感じ入った。「文学研究」にはヘルダーリーンのことをよく書かれた。ノヴァリスの「青い花」が流行るころで、私にはさっぱり解らないから、そういうと、訳本を出された先生は、ニャッと笑って、あれはわからぬものです、とあっさり言われたものだ。

当時の文学科の長老にはそのほか春日先生、豊田先生がおいでだった。春日先生は学問に、実にきびしい方だったし、豊田先生は、よく「文学研究」に書いたものを批評してくださった。当時大長老と思

ったが、今にして思えば、ただいまの私より十年もお若かったのである。

春日先生のあと、高木先生が赴任され、例の「吉野の鮎」などを掲載されたのもこの「文学研究」だった。

小野島さんは梵文学の専攻で、高木さんが酒仙と名づけられたところだが、このかたはかねて好んでいられた油山に家を建てられ、一度そこを訪問したが、山小屋風な造りで、庭先きにころがって来ている巨岩があり、これがたいそうに自慢で、これは町にもって行ったら、どえらい値打ちですぞ、といいながら、コップ酒をあふられた。小牧先生の定年退職送別会を大善寺で催した際、珍らしくほろ酔いになった小牧先生が、帰りに肩を支えられながら、童謡を唱われたのも印象が深かったが、その折も小野島さんはもう大虎で、両手両足をかかえられながら、それでもまだ、カーリダーサは、シャクンターラは、とわめき立てられた。これほど純粋な人が又とあろうか、と私は思った。このかたのリッサンハーラなどの訳はぼつぼつ「文学研究」に載ったが、遂に完成を見ずに亡くなった。惜しいことであった。後に医師から禁酒を申し渡された、ときいた両三日後、中洲河畔のビール園で出会ったから、おや、禁酒の筈だのに、というと、ビールなど酒ぢゃありませんよ、と呵々大笑された姿が目に残る。「文学研究」の会合に、可愛いい小さなお嬢ちゃんをつれて来られたこともある。

謹厳で、よくこの会の世話をされた笹月さんは、戦時中他の大学に移られ、その後、福岡女子大に来

任されたが、病気で亡くなられた。亡くなる三日前、私が見舞いにゆくと、病院のベッドにキチンと坐って挨拶されたが、その直後、手術の結果が意外に思わしくなく、私の上京中に急逝されたのである。

以上の諸先生が去られたあと、文学研究会は中山、進藤、小島諸先輩の時代となる。それに英文の前川さん、独文の末松さんのあとを高橋さん、西田さん、国語の福田さん、仏文の永田さんなど、だんだん賑やかになった。毎月研究談話会を開くことになって、会員の一人一人が毎月代る代る自分の専門の分野に関する話をする。これは後には次第に間遠になったが、戦後からかなり長くつづいた。昭和何年であったか、まだ戦後の寒々とした冬であったが、文学部の旧館二階の進藤さんの部屋でいつもの会を開き、大きな二つの火鉢に木炭をカッカとおこし、午后から日の暮れるまで語りつくし、はては祿でもない話になるのが常だが、最後にウイスキーをそれぞれ茶碗に一ぱいずつ呑んで解散となり、私は進藤さんと二人で玄関まで出たが、どうしたことか進藤さんがパッタリ倒れた。驚ろいて人を呼び、助け起そうとしたまでは覚えているが、気がつくと二人ともねかされていた。胸がワクワクとして苦しく、木炭のガスに中毒したのである。それから重い脚を曳いて家に帰ったが、あとで聞くと、福田さんはまっくらな自分の部屋の中にたおれ、末松さんは、廊下から部屋に身体を半分入れてたおれ、小島さんと永田さんは千代町あたりの電車の中でやられたということで、皆一応危険な状態であったらしい。あのまま死んでしまったら、文学研究会は総つぶれだったという、あとでは笑い話になったが、これも戦後の

物資乏しい大学生活の想い出の一つだろう。

文学研究会は、たびたび一泊旅行をした。呼子に行って、生きづくりの鯛の目玉におびえたり、嬉野の宿の女主人の美しさにまいった先生があったり、想えば楽しいことであった。こうした旅行が復活した形で、一昨年、文学研究会で、壱岐対馬旅行をしたときの楽しかった想い出は、私は生涯忘れられまい。

国文の杉浦さんの逝去はまことに痛ましかった。芭蕉研究、あるいは九州蕉門の研究など「文学研究」にたびたび書かれたが、癌ときまってから、見舞にゆくのは実にこちらが苦しかった。亡くなる一週間前、自分もすでに覚悟して、私に向っていろいろ言い残されたこともあるが、私は胸もさける思いであった。大事な仕事の一つであった岩波文庫の「奥の細道」の刊行がやっと亡くなる当日間に合って、それをいとしむように飽かず眺めて、ばったり手を放すとともに息を引きとられた。

言語の吉町さんは九州方言の研究をいつも発表された。あの性格で、往々皆をこまらせたが、ある時「文学研究」の校正で、私があまりひどい訂正をしたところ、紙片に書いて、「貴兄にあるまじき暴挙」と叱られて恐縮したことがあり、今以て私は自分のいましめとしている。

この会の世話をしつづけてもらった小原さんも退職された。対馬を一緒に旅した松浪さんも最近東京に移られた。もとより私がはじめ九大に来たころお世話になった諸先生諸先輩は、とっくに退職されて

しまっている。かつては学部で最年少であった私さえ、今年定年退職した。時代はどんどん移ってゆく。古いものは次ぎつぎに消え去るのが順序である。

今や英文の前川さん、元田さん、独文の高橋さん、西田さん、仏文の永田さん、田中さん、国文の福田さん、中村さん、春日さん、今井さん、言語の松田さん、そして私のあとに中文の岡村さん、と実に多士済々の時代となった。これから九大の文学科は新らしい気分で、めざましく盛り上ってゆくであろう。ただ願うことは、従来のこの会の、あの仲のよさはいつまでも続けてほしい。これはかねて他学科の人から、いつも羨ましがられていたことだ。こうして各国文学の教官が集まって、たがいに知識を交換しあう機会があるということは、そうどこの大学にもあることではない。また私はいつも思うことだが、会員のそれぞれ専門の分野の論文は、まず第一にこの「文学研究」に掲載することが、九大に職を奉ずるものの義務ではないかと考える。かつて進藤さんの仏蘭西喜劇に関する論文、中山さんのチョウサーの研究、前川さんのワーズワースの研究、永田さんのルソーの研究、高橋さんの文芸論、をはじめ、そのほか各教官が皆この誌上に特色を発揮された。私もずいぶん皆さんに教えられた。「文学研究」はこの機能を充分発揮すべきだと思う。

九大を離れて、もとの古巣がなつかしいままに、思い出話をくりのべた。文学研究会と、その紀要とが、いよいよ発展されんことをいのる。(四二、一〇、二五)

『西日本文化賞』への推薦文

九州大学文学部

一、候補者　九州大学名誉教授　文学博士　目加田　誠

一、業績の首題　『中国文学研究の功績』

業　績　内　容

わが国における中国文学の研究が、いわゆる漢学の古い殻から脱却して、西欧諸文学のそれに比肩する近代的な研究に入ったのは、本国の中国よりもやや先んじたとはいえ、ようやく今世紀になってからのことであった。目加田誠博士は、周知のごとく、そうした斯学の黎明期から今日の隆昌期にかけて、実に三十数年もの長期にわたり、終始その第一線に立ち、意欲的な開拓者として、また卓越した指導者として、内外の学界に重きをなしてきた。現在、わが国における斯学の第一人者として博士を推すことは、誰しも異論がないであろう。

博士の学風は、まことに該博芳潤であった。これは、もちろん天賦の質ともいえるであろう稀に見る豊かな文学的感受性と、それに加うるに弛むことなき真摯な学問的研鑽によって築きあげられたものである。博士のこうした学風は、古くは「詩経」・「楚辞」から近くは現代の人民文学に及ぶ、きわめて幅広い研究となって現われ、次々と発表される幾多のすぐれた著書・論文は、つねに権威ある清新な学説として、学界を強く啓発するものであった。いま、その業績内容の概略を述べれば、以下のごとくである。(末尾に附した業績目録および参考資料として提出した著書を参照されたい。)

博士の数多い業績の中で、まず挙げねばならないのは、「詩経」と「楚辞」についての画期的な研究とその精細流麗な注釈である。いうまでもなく、この中国最古の二大詩集は、以後三千年にわたって展開する中国古典文学の源泉をなすものであって、少なくとも清朝までの中国の文学は、この二大詩集を理想とし、その精神を祖述することに最大の努力が傾けられてきたといって過言ではない。従って、この二大詩集の研究こそは、中国古典文学の研究にとって、最も根本的なものであり、また最も本質に直結するものであるといわねばならない。博士は、まず「詩経」の研究から着手した。だが、博士がこれを研究しはじめたころは、この詩集がもともと民間歌謡や祭祀饗宴の楽歌であったにもかかわらず、中国はもちろんわが国においてさえも、いまだ儒教の封建的道徳に基づく詩経観から脱しきっておらなかった。というよりも、むしろそうした陳腐な伝統的解釈を正統とする考え方が、かたくなに学界のおお

むねを支配している状況であった。博士は、いち早くこの不合理さを徹底的に打破し、純粋に文学作品として研究することによって、直接古代中国人の真実の心を求めようとした。かくして長年にわたる精魂こめた研究の成果が、『詩経』（日本評論社刊）・『詩経訳注篇（国風）』（丁字屋書店刊）・『新訳詩経』（岩波書店刊）の諸著書、および「豳詩考附束新考」・「詩経に詠われた自然界」・「春秋の断章賦詩に就いて」・「詩教」・「詩経」・「詩経（豳風十月「殆及公子同儕」）について」などの諸論文である。これら一連の諸業績は、博士の内外における名声を確定的にしたものであるが、その論証には、「詩経」内の各詩相互の比較検討・先秦諸文献との関連追求など、現在試みうる可能な限りの科学的な方法がすべて駆使されており、また注釈には、汗牛充棟もただならぬ漢代以来の諸注釈がくまなく参照せられ、さらに新しい観点から改めてそれらに精密な検討が加えられ、適確な判断が下されている。学界は、博士のこうした偉大な論著によって、はじめて「詩経」に対する全く新しい視点を教えられたのであり、また博士の本邦最初の信頼すべき邦訳を得て、この方面の研究に確実な拠り所を与えられたのであった。博士は、また「楚辞」の研究においても、不滅の業績を挙げている。なぜならば、この研究は、博士によって、従来の文献学的・民俗学的研究の域から、本格的な文芸学的研究に高められたからである。『屈原』（岩波書店刊）は、その野心的な論考であり、「詩経」と併載された『詩経・楚辞』（平凡社刊）および「九歌試訳」は、現在における最高の権威ある名訳である。

つぎに挙げるべき業績は、唐詩および杜甫の研究である。唐代の詩は、長い中国文学の歴史の中でも一きわ高く聳える、世界に誇る文化所産であり、なかんずく杜甫は、その唐代の数多い詩人のうち特に卓絶した詩人であった。博士は、この杜甫を格別愛した学者であって、『杜甫』（集英社刊・漢詩大系本）・『杜甫』（集英社刊）・「杜甫」（「中国の思想家」所収）は、この詩人に対する優れた論著と訳注である。また唐詩全般についての研究としては、『唐詩選』（明治書院刊）は、わが国で親まれてきたこの書に対する空前の詳細雅潤な注釈であり、「初唐の宮廷詩人の群」・「王維―安史の乱と詩人たち―」・「白楽天の諷諭詩」などは、いずれも学界懸案の問題を鮮かに解明した、識見高い論文である。特に前述『唐詩選』の冒頭に掲げられた一五〇頁に及ぶ「唐詩概説」は、優に一冊の書物に値し、博士の多年にわたる唐詩研究の結晶ともいうべき名論文であって、これだけ唐詩の変遷を詳細に語り、これだけ唐詩の真髄を的確に指摘した論文は、かつて内外の学界に出現したことがなかった。おそらくは将来にわたって不滅の光芒を放つ名著でありつづけるであろう。

博士の研究範囲は、さらに驚くべき広さに拡大している。六朝・唐代文学においては、中国のみならず世界でも最初の文学評論書である「文心雕竜」十巻に対する本邦最初の全訳が博士の手によって完成し（「文学研究」三四・三五・四〇・四一・四七・六〇・六二輯）、論文として「洛神の賦」・「六朝文芸における神と気の問題」・「劉勰の風骨論」・「中国文芸思想における自然ということ」・「詩格及び詩境に

ついて」・「唐代小説について」などがあり、また唐末・五代から宋代にかけて流行した文学ジャンル「詞」（小唄）については、「塡詞選釈」・「詞源流考」があり、明・清文学については、「李笠翁の戯曲」・「水滸伝解釈の問題」・「清代文学史」・「聊斎志異の文学」・「孽海花」がある。さらにまた古典文学全般にわたる問題を考察した論文には、「雅について」・「楽府についての一考察—民歌と文人の詩の問題—」・「風格ということ」があり、日本文学との比較論には、「滝沢馬琴と水滸伝」・「紫陽花」があり、史学関係の論文には「雍正帝の思想対策について」・「陳碩甫伝」がある。

上に挙げた諸論著は主として古典文学に関するものであるが、博士はまた現代文学の研究においても、わが国での傑出した開拓者の一人であった。戦前つとに『中国現代文芸』（共立社刊）・「民国以来中国新文学」など注目すべき論著を公にし、特に戦後には「曹禺の戯曲」・「聞一多評伝」・「礼教喫人」・「文学と道徳—中国近代文学における儒教道徳排撃の思想について—」・「祝福の書かれた頃」など、文芸思想の面から見た示唆に富む論文を続々と発表した。わが国の中国現代文学の研究は、戦後になって著しく活発化し、長足の発展をとげたのであるが、博士の如上の諸論文が、この新興の文学研究に強い影響をあたえ、その進展に寄与するところは、まさに甚大であった。

以上、博士の主要な論著について概観したが、これらによっても明らかなように、博士の学問は、驚嘆すべき広さと深さを合わせ持つものであって、これらの著書・論文が発表されるたびに、わが国の学

界はもちろん中国や西欧の学界においても大きな反響があったことは、むしろ当然のことといわねばならない。従って博士は、全国の学界において極めて重要な指導者であった。日本学術会議会員・日本中国学会理事・同評議員・同専門委員などに推される一方、昭和四〇・四一両年度にわたって交付された文部省科学研究費による綜合研究「六朝芸術論の研究」が、中国文学・中国哲学・美学・東洋史学・考古学・印度哲学などの全国有数の学者十数名を糾合してなされた際、博士がその指導者に推されたことなどは、博士の学問的声価を如実に物語るものに外ならない。

また博士は、昭和八年このかた実に三十有四年の長きにわたって、九州大学中国文学科の主任教授であった関係上、多くの優秀な学者を養成すると共に、九州中国学会長として西日本の斯学の発展に挺身尽力し、さらに報導関係その他の文化面に寄与するところもまた絶大であったこと、すでに周知のごとくである。

昭和四十二年九月十三日